

中 学 校

●もっと運動やスポーツをするようになるには…

もっと運動やスポーツをするようになる条件は、運動時間別、運動の好き・きらい別、体力総合評価別にみると、ほぼ共通した結果が得られた。具体的には、「好き・できそうな種目があれば」、「友達と一緒にできたら」、「自分のペースで運動やスポーツができたら」、「自由な時間があれば」が上位をしめている。

運動時間が短い、運動やスポーツがきらい、総合評価でD+Eの生徒に特徴的にみられたのは、「自分のペースで運動やスポーツができたら」がいずれも3位以内にあげられたことである。授業では、外部指導者との連携による指導体制の充実や、個々の生徒に応じた課題の提示等を工夫したい。

また、男子に比べ女子に特徴的にみられたのは、「体型の変化に効果があるなら」が上位にあげられたことである。授業では、健康を保持増進するためにも日常生活において適切な運動やスポーツを続ける必要があることを理解させ、取り組ませることが有意義と考えられる。

「好き・できそうな種目があれば」
「友達と一緒にできたら」
「自分のペースで運動ができたら」
「自由な時間があれば」

授業改善の視点

- 生徒にとって実現可能なねらいや個に応じた目標を設定させることなどにより、十分な達成感や充実感を味わわせる
- 授業の中で場面を設定し、仲間とかかわり合いながら進める学習を充実させる
- 課題解決の場を選んだり、助言し合ったりしながら進める学習を充実させる
- 中学校第3学年では、特性や魅力に応じた領域のまとまりから選択しての履修がはじまるので、生徒自らがさらに探求したい運動やスポーツを選択できるようにするための条件整備を進める

●運動やスポーツの「得意・苦手」、「好き・きらい」の変化から

男女ともに運動やスポーツが「ずっと得意（好き）」の割合が最も多く、「苦手（きらい）」だったことがあるが今は得意（好き）」の割合を含めると、男子の得意が71.9%、好きが86.6%、女子の得意が53.5%、好きが72.8%であった。

変化の内訳を詳しくみていくと、男子では「小学1・2年時から小学5・6年時」の変化（以下、小学校期）と比べて、「小学5・6年時から中学2年（現在）」の変化（以下、中学校期）では、「苦手になった・きらいになった」割合にほぼ差がみられないが、「得意になった・好きになった」の変化は小学校期の方が中学校期よりも変化の割合が大きかった。女子では、小学校期では「得意になった・苦手になった」がほぼ同じ割合であるものの、中学校期では「得意になった」が5.6%に対して「苦手になった」が12.0%と上回った。一方で、「好きになった・きらいになった」については、小学校期・中学校期ともに変化の割合はほぼ変わらなかった。特に男女ともに中学校期で「運動やスポーツが得意」と思う割合が低くなってしまいうことに着目し、授業改善に生かすことが必要である。

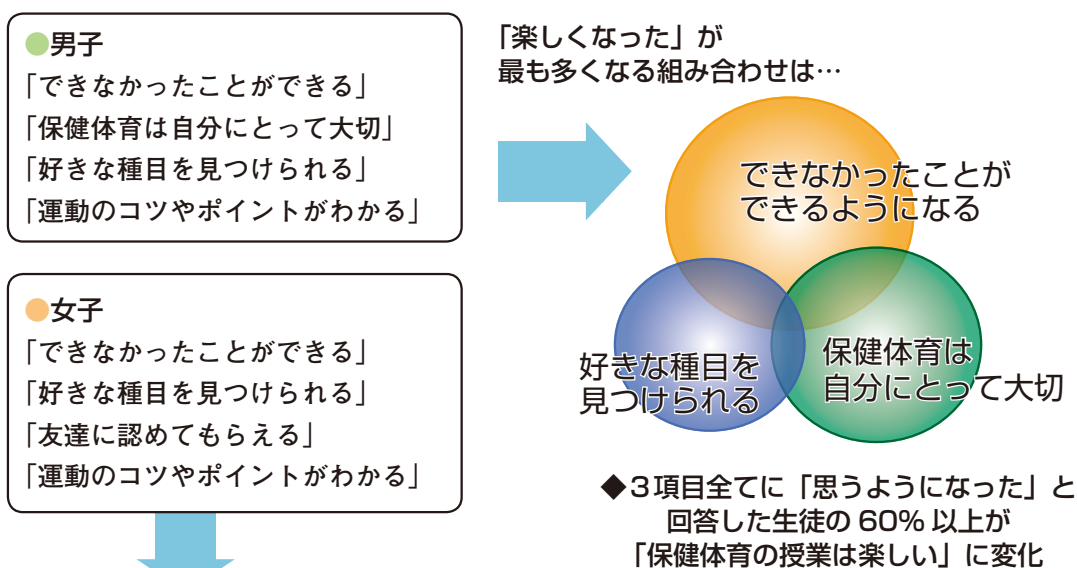
生徒たちは「運動やスポーツが苦手」だと思っても、「運動やスポーツがきらい」とは必ずしも結びついていないようである。そのため、運動やスポーツに対する好意的な感情を維持させつつ、生徒たちが「できた」と実感するような指導法等の工夫を行うことが重要と考えられる。

●「保健体育の授業は楽しい」と変化するきっかけを探る

「保健体育の授業が楽しくない」から「楽しい」に変化した生徒は、他の保健体育の授業に対する質問項目への回答がどのように変化したかをみると、男女それぞれ以下の項目で「思わない」から「思う」に変化した場合が上位にあげられた。

組み合わせでみると、男女ともに「保健体育は自分にとって大切」「できなかったことができるようになる」「好きな種目を見つけられる」の3項目全てに「思うようになった」生徒が、「保健体育の授業は楽しい」と変化した者が最も多かった。

中学校女子に特徴的にみられたのは、「友達に認めてもらえる」であった。このことから、授業の中で場面を設定し、仲間とかかわり合いながら進める学習を充実させたり、仲間からの称賛やほめしを意図的に増やしたりする等の工夫によって、保健体育の授業に対する好意的な意識を高め、運動に親しむように促すことが効果的だと考えられる。



●男子
「できなかったことができる」
「保健体育は自分にとって大切」
「好きな種目を見つけられる」
「運動のコツやポイントがわかる」

●女子
「できなかったことができる」
「好きな種目を見つけられる」
「友達に認めてもらえる」
「運動のコツやポイントがわかる」

授業改善の視点

- 授業で「できるようになる」実感をもたせる指導の工夫が大切
- 生涯にわたるスポーツ実践や健康の保持増進、体力の向上などが自分にとって重要なことであることが理解できるようにする授業づくりが大切
- より多くの種目のもつ楽しさに触れさせることができるような指導の工夫が大切

●教員の関わりは、保健体育の授業に対する意識を好転的に

小学校の調査結果によると、「先生にほめてもらえる」、「先生にいてねいに教えてもらえる」に肯定的な回答をする児童ほど他の全ての授業に関する項目について肯定的な回答をする傾向にあることがわかった。中学校では、小学5・6年時の授業についての質問項目しか比較対象がないものの、同様の結果がみられる。

特に、運動やスポーツに苦手意識をもつ生徒や運動やスポーツがきらいな生徒が増える中学校段階では、こうした生徒に対する手厚い指導が欠かせない。生徒の状況を適切に把握し、根気強くいてねいに教え、少しの変化にも努力を認め、ほめし続ける教員の存在が必要と考えられる。